
機動戦士 ガンダム

吉良飛鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士 ガンダム

【NZコード】

N1398S

【作者名】

吉良飛鳥

【あらすじ】

D・E（デベロップメント・イラ　英・development
era）80

地球では人口が増え、資源・住む場所確保のためにコロニー開発計画を推し進めた

そのため世界は大きく四つになった。

アメリカ・ヨーロッパを中心とする欧米諸国連合（通称：EAVN）
中国・ロシア・インドを中心とするアジア連盟（通称：AL）

日本・オーストラリア・ニュージーランドを中心とする太平洋連邦
(通称：P.F.)

アフリカ共同自治体 (通称：A.S.G.B.)

この内緊張状態にあつたEAVNとALの間に経済摩擦が理由で戦争が勃発し、中立であるP.FとA.S.G.Bには常に圧力をかけられていた。

そう、第三次世界大戦が始まっていたのだ。

第一話～平和な日に～

太平洋連邦の一国、日本。

そこの大工場ハイスクールに通う学生空野翔太は眠そうに授業を受けていた。

空野が眠りにつこうとしたそのとき、

ドーンズガズガズガガガガ・・・

と大きな爆音と共に大きな振動が来た。

「じ・・・地震？」

と隣にいるマリー・スペクトルが滋きに近い声で聞いてきた。

空野「違つ・・・」これは・・・」の振動の伝わり方は爆発・・・！
そうして「内にまた先ほどの爆音と振動が来た。

先生は避難するように指示をだした。

空野「逃げるつて・・・どこに？」

空野はこの振動が爆発だと確信しており、だとすれば狙いは学校の隣にある軍事基地という結果になるので実質逃げる所がない。

とりやえず外にでて、逃げるあてもなくそのままよつていたら、
懐かしい影が見えた。

空野「つ・・・月夜見！！」

その影は立ち止り振り向いた。

月夜見「そ・・・空野じゃねえか！？」

普通ならどうかのレストランかなんかで再開を喜びあうのだろうが
それは状況が状況なためそれはムリだ。

月夜見「ちょっと来い。お前に見せるものがある。」

月夜見は基地の一角に空野を呼び出した。

建物のような格納庫からでてきたのは今までに見たことのないもの
だった。

空野「モ・・・モビルスーシ・・・なのか？」

月夜見「P-L-M50000機体名、『デアフリー』」

月夜見は空野に向き、

「空野、ちょっとこいつに乗つてくれないか？」
と言つた。

ああと空野は了解し、

機体・・・デアフリーに乗り込んだ。

空野「通信回線オールクリア。エネルギー供給率を通常時からスク
ランブルミニションモードへ設定。メインシステム起動！」

月夜見から大体の説明を受けデアフリーを起動させた。

第一話～その名はガンダム～

空野が観たのは焼けている町であった。

空野「みんな・・・無事だよな・・・」

根拠はないけどみんな無事といつことを望んでいた。

迫り来る戦闘機F-74、EAVNの主力戦闘機だ。

「！」で銃を使つたら万一に外れたときに町が吹つ飛ぶぞ・・・これはビームサーベルを使うしかないか・・・と考えている内にEAVNの戦闘機の一つがこちらに機関銃を撃つてきた。

デアフリードはなんとか盾をだし回避運動をしていた。

空野は「コソノヤロー！」と叫び、袖の部分から淡いピンク色ビームサーベルを抜刀し、一瞬にしてその戦闘機の翼を切つた。

ほかの戦闘機にたいしても翼を切り裂いた。

そして残る一機はなにやらスピードを上げてこちらに突つ込んでくる。

空野は特攻かと思い盾を投げつけた。

なんとか特攻されずにはすんだが、空野の投げた盾は戦闘機のコックピットの部分を直撃し、爆発した。

司令部からの通信で基地に来るよう言われたが正直基地には行く

気がしなかつた。

基地に着きMSをしまう格納庫まで案内され、そこでコックピットから降りたら拍手と共に月夜見が来た。

そして月夜見と共に軍のお偉いさんは月夜見と一緒に歩く行つた。

そしたら、なぜか軍のお偉いさんは空野に
「君専用MSのところに行け」
と言つた。

わけもわからない俺に月夜見が無理矢理そのMSのところへ連れて行く。

空野「これは・・・!?

月夜見「PL-L-S001MS、機体名、ヘリオスガンダム」

空野「ガンダム・・・俺の機体・・・」

月夜見「お前の考えたLS-D、光速炉を始めて実装してあるぞ」

空野「ところで軍とは関係ないなんで俺の専用機が・・・?」

月夜見「お前はこの平和を守るにはまだ力が必要だと言つた」

空野「ああ言つた」

月夜見「これがその平和を守る力だ」

空野「軍に入れというのか?」

月夜見「そつは言わない。ただ、軍に入らないならこれは他の兵が使うだけだ。」

空野は少し考えながらついた。

「軍に入る。そうすればこの力が手に入るのであれば……!」

そして月夜見と空野は握手をした。

第二話～終わり無き戦い～

ふう～・・・

初めてガンダムを見たときから数えて3回目の模擬戦が終わった。

月夜見「なかなか腕が上がってきたな」

空野「いや、まだこの機体の性能にたよってばつかだよ」

月夜見「そんなことより、面会人がきてるぞ」

空野「面会人？誰だ？」

月夜見「あつてみればわかる」

それを言つと月夜見は意味深に微笑みかけた。

月夜見に案内され応接室のような所に通された。

そこにはマリー・スペクトルがいた。

「久しぶりー」

いつもと変わらない調子で明るくマリーが話しかけてきた。

空野「おお、久しぶりだな」

空野も明るく応えてみせた。

マリーは空野の服装をみて、

「軍に入ったの？」

と聞いてきた。

空野は、何て答えていいのかわからず口任せに答えた。

「この服装で軍に入つていなかつたら単なる軍ヲタクだろ」

マリーは、少し笑つて、

「頑張つて」と言った。

そこに、ウーーーウーーーとサイレンが鳴った。

空野は「マリー、むやみに動くな！軍人の案内にしたがえーーー」と言い、走り去った。

空野は小型の通信機を耳につけ、オペレータであるソフィイ・アンに状況を聞いた。

ソフィイ「太平洋上にEAVN軍と思われる戦艦及び戦闘機を確認」空野は、まず戦闘機を数機落とした後、戦艦を沈めようとした。

タイミングを見計らつたかのよう月夜見から整備完了の連絡がきた。
「感謝するぜ月夜見」と、空野は咳きヘリオスガンダムに乗り込んだ。

ソフィイと通信を繋ぐ。

ソフィイ「敵の戦力は、戦闘機15、イージス艦5、空母3です。」

空野「了解。援軍の可能性は？」

ソフィイ「今の所は否定できないわ。」

空野「わかりました。発信許可をください。」

ソフィイ「発信を許可します。射出タイミングをヘリオスに譲渡」

空野「了解。空野翔太、ヘリオスガンダムいきますーーー！」

勢いよくヘリオスは基地からでたら飛行変形になり太平洋を目標に飛び立つた。

第四話／太平洋の戦い

基地から飛び出し約1時間半ほどで戦場に着いた。

空野は

「思つたより早いな・・・普通の戦闘機ならどんなに急いだつて3時間ほどはかかるぞ・・・」

とコックピット内で呟いていた。

見方の戦艦を発見し、識別コードを送り通信を開く、

空野「こちら、高萩日本防衛基地から派遣された空野翔太です。太平洋連邦軍、援護します。」

見方の戦艦のオペレータ「こちら、太平洋連邦軍第143ハワイ諸島防衛及び日本近海防衛小隊所属のアレースです。識別コードを確認しました。」

空野は長い肩書きだなと思いつつ、敵の状況を聞き、先ほどと変わらぬが、やや太平洋軍が劣勢ということを知った。

アレースの指揮官が皮肉めいて「援軍というのは君だけか?」と聞いてきたのでないだけだと返しといった。

空野「さてと・・・」

空野は気合をいれると、イージス艦に向かつて飛んでいった。

イージス艦のブリッジを羽に備え付けている実体験で突き落としたかと思えば、

MSに変形し、イージス艦の後ろの方にビームサーベルを突き刺した。

それでイージス艦一隻が沈むと思ったときには、ちょうど上空をとんでいた戦闘機の左翼をビームサーベルで切った。

そしてまた飛行変形し、迫り来る銃弾を縫うように避け、ビームサ

ブマシンガンを何発か撃ち5機の戦闘機を落とした。

再びMSに変形し、ビームサーベルで空母を沈め、さらにその近くにあつた空母にも投げつけた。

これで三隻あつた空母は残り一隻となりイージス艦も残り4隻さらには戦闘機も6機ほど失つたEAVN軍は撤退をし、空野も撤退許可をもらひ基地に戻つた。

そして、基地に戻りコックピットから降りたら祝福モードになつていたが、戦闘に疲れきつた空野はその場に倒れるように寝込んだ。

第五話～大気圏脱出～

D・E 80 3/10

P・L軍伊豆防衛基地

そこでは、P・L軍の最新鋭戦闘母艦「アマテラス」の出港式をしていた。

ちなみに乗る人は134名ほどで、月夜見と空野も乗る予定だった。人事部の人人が名前を読み上げている。

「・・・月夜見明大尉以上、技術部40名

マリー・スペクトル少尉、空野翔太少尉

以上、パイロット2名

・・・・・・・・・・

副艦長、ジョージ・アデス中佐

艦長、ジョシュア・ニコラス中佐

指揮官、飯島直美大佐

以上134名が太平洋連邦最新鋭戦闘母艦アマテラスの乗組員である

とジョセフ・ラミアス准将が演説のような事をしていた。

そして、そのあと指揮官である飯島直美が

「本艦は月基地の援助に向かう。パイロットが一人しかいないが、少数精鋭ということで頑張っていただきたい。また、」

かなりの演説振りに空野はなんとか居眠りと欠伸をこらえていた。

指揮官の飯島直美が

「総員、所定の位置につけ！～」

と号令を掛けたところで、

艦の中にある自室で大気圏脱出を待つた。

空野は「ガンダムは船の中に入れてあるし、宇宙に行くには対Gシートに座つてればいいし・・・」

と独り言を呟いていた。

そして、念のために格納庫に向かい、ガンダムがあることを確認した。

そして、もう一つガンダムの名を持つMSが格納庫にあった。空野は、「そういえば、パイロット2人だけなんだよな」と呟き、「挨拶でもしてくつか——！」と伸びながら歩き出した。

そしてもう一人のパイロット、マリー・スペクトルの部屋の前に立ち、ノックをしようとした瞬間勢いよくドアが開き、空野の顔面を強打した。

マリー「あつゴメンなさい・・・！」

空野「いつ・・・いやボケつとしてたから・・・」

と頭をさすりながらマリーと田があつた。

マリー「あつ・・・空野君ー？」

空野「マリーー？」

空野はビックリした。同姓同名の名前かと思つたけど、本人だとは思わなかつた。

空野「どうしてここに？」

普通一番これが気になるだろ（多分）ことを聞いた。

マリーはビシッと敬礼をし、

「D·E·80 3／5軍に志願し、正式にガンダムのパイロットとなりました。階級は少尉です。」

と答えた。

空野は返礼をしながら

「3／5つことは・・・俺が太平洋のど真ん中まで行つて援助していたときか・・・だけどなんで？」

とつぶやいた。

マリーは、

「EAVNに攻撃されたとき、親を2人ともなくしたの・・・」
といい始めた。

マリー「そしてね、その時は私の胸が絶望感で一杯だつたの。それで空野君が軍に入つてゐるつて聞いて、真偽を確かめて、面会人として行つたわ。そして、私も思つたの・・・『私も戦わなきや』つて。そして、模擬戦やつて、実力はあつて正式にガンダムのパイロットになつたの。」

マリーの声は段々涙声になつてきた。そこに、「本艦はまもなく発進する。総員、各自の対Gシートで待機せよ。」
といつ放送が入つた。

空野はマリーを彼女の対Gシートに座らせて、その隣にある空野の対Gシートに座つた。

直後にカウントダウンが始まり、
発射したと同時にものすごい衝撃が襲つてきた。

それから大気圏をこえるのに何時間かかったかはわからない。だけど、気付いたらGの圧力から解き放たれ、無重力のおかげで体が浮きそうになつっていた。

気付けば、マリーの手が空野の手の上にあつた。不思議とマリーと目があつ。

そこに、飯島直美指揮官からの艦内放送で、ガンダムのパイロットはブルッヂに来いと言われ、空野とマリーはブルッヂに向かつた・・・いや、向かおつとした。しかし、無重力のおかげで、体が思うように動かない。

なんとか無重力での動きになれ、ブリッヂについた。

飯島直美は、

「無重力での移動方法は難しかつたそうだな」と、言いふつと笑つた。

そして、飯島直美が

「早速だが、二人にミッショーンを」

といいかけた所で、

オペレーターのソフィ・アンが、

「3時と9時の方向に高熱原体急速接近を察知！！」

と急ぐような感じで言つた。

それに、いち早く空野が反応し、

「敵か！？数はどの位だ？」

と聞いた。

ソフィ「3時の方向、敵20。9時の方向、敵30！…これは…！」

空野がどうした？と聞く前に、「モニターに映します」とソフィが手元で操作を始めた。

そこには、人型の機動兵器モビルスーツ（MS）が移っていた。

空野は緊急であるかのように、

「飯島大佐！」

と怒鳴りつけるかのように呼んだ。

飯島大佐とのアイコンタクトが成立し、

飯島「宇宙に来て間もないが、本艦はまもなく戦闘に入る。

総員第一戦闘配備。パイロットは自分の機体にて待機せよー。」

と、落ち着きながらも、大声で指示を出す。

空野も、マリーを引つ張つて格納庫に着いた。

飯島大佐から通信が入る。

「まもなく射出する。状況は、ハッキリ言つてかなり厳しい。しかし、これだけは言わせて貰う・・・死ぬなよ」
空野も、マリーも、これに対しても「了解」と応えた。

マリーへ通信をつなぐ・・・
「マリー、君は3時の方向を頼む。こつちま9時の方向をやる」
これにたいして、マリーの返事は、
「わかったわ・・・」
と言つた。

船の両脇にあるハッチが開く。
ソフィーの「射出タイミングを譲渡」
の言葉に合わせて、
空野 「空野翔太、ヘリオスガンダム、行きます!!」
マリー 「マリー・スペクトル、メビウスガンダム、発進します!!」
といいそれぞれのポイントへ行つた。

第六話～宇宙戦～

「9時の方向に敵30、3時の方向に敵20か・・・

飛行変形したヘリオスガンダムのコックピット内で空野はそう呟いた。

空野とマリーのガンダムの性能差は次のとおりだ

- ・ヘリオスは飛行変形できるがメビウスはできないしかし、メビウスには両肩に鳥を連想させる大きな翼がある。
- ・ヘリオスは接近戦仕様で、メビウスは遠距離仕様である。そのため、機動性は、ヘリオスの方が勝っているが火力はメビウスの方が優れている

大雑把に言つとこのような感じである。

そのため、後方でマリーの援護を受けつつヘリオスは敵部隊を内側から攻撃するという戦闘シミュレーションをこなしてきたが、まさか、こう別れてくるとは思わなかつた。

ヘリオスを飛行変形させたままサブマシンガンを打ち込みながらMSの群れに飛び込み、両サイドの実体剣で敵MSをコックピットごと両断し、MS変形をしたかと思えば、そでから出てきた二本のビームサーベルで数機のMS「ツクピット」と突き刺した。

空野はマリーの状況が知りたくてマリーに通信をいた

「マリー、そつちはどうだ? こつちはのこり十数機つてといひだマリーから通信が入る

「こつちは残り10機もないわ。今からそつちの援護に行くわよ」

空野は「了解」と返事をして、飛行変形し、敵の群れに入り込んだ。

しばりへするとマリーからの援護で、極太のビームが来た。
そのビームを回避した敵MSを次々に撃破していく。

敵の戦艦から帰艦信号がしき光がみえ、次々に敵が帰艦していった。
アマテラスからも帰艦信号が発射されたので空野とマリーは帰艦した。

第七話～アマトラス、月基地へ向け全速前進～

「とりあえず、お疲れ様」

と、飯島直美は空野とマリーにそう告げた。

空野は「とりあえず」の部分に引っかかり聞いた。

「『とりあえず』ってどういうことですか？」

空野の問いに飯島直美はため息混じりに言った。

「私たちは今『戦争』をしてる。また今見たく突然襲われるかも

しれないわ」

空野「…………」

「…………」

空野は、ここで初めて気づいた。「戦争」をしているこの事実を…

…

空野の隣にいたマリーが、飯島直美に、「用があつて呼んだんじや……？」

と申し訳なさそうに聞く。

飯島も、「ああ、そうだった」と言いつぶつぶ、モニターに現在の居場所の情報をなどを映し出した。

「実は、この近くにある小惑星基地を田指していたんだが……」
そう言い、モニターにその基地を出す。そしてすぐにモニターが切り替わり、

「この辺にEAVNの戦艦ふねと見られるものがいくつかあり、この戦艦を振り切つて、少し遠くなるが、月基地へ向かおうと思う」
そう言い、元から予定されていたルートと月基地へ向かうルートが表された。

飯島直美は、「これについて皆の意見を聞きたい。」と言った。

空野「意見と言つより質問なんですけど」

皆の視線が一斉に空野へ集中する。

飯島「なんだ？」

空野「あ、はい、この戦艦ふねが月基地へ行くのには賛成なんですけど、小惑星基地からの援護はあるのですか？」

飯島「今のところはわからないが、必要なならば援護するよつ要請しておいた。」

空野「つまり、援護するかどうかはEAVNの動き次第といつ」と
でしようか？」

飯島「そういうことだ」

空野「ありがとうございます」

マリー「あの、あたしからも質問なんですけど・・・」

空野に向けられていた視線がマリーへ集中する。

飯島「なんだ？」

マリー「EAVNの戦艦ふねに動きが無くてもガンダムは当艦の援護につくのですか？」

飯島「一応そのようにしてもらつてしまつだ。」

マリー「ありがとうございます」

飯島「以上、質問、意見はないか？本艦はまもなく月基地へ行く。また、EAVNがすぐ目の前にいるため第一種戦闘配備！ガンダムは当艦の援護へつけ！アマテラス、月基地へ向け全速前進！！」

ブリッジにいる全ての人が一斉に

「「「了解！！」」」

と敬礼したのは言つまでもないだらつ。

第八話～鏑矢～

空野「しかし、EAVNのほうもそれらしき動きを見せ無いな」
空野は「クピット内でそう呟いていた。

「これからありがたいことだけぞ」と思つていたら田の前に信じがたい光景が広がつていた・・・

EAVNの艦の数が尋常ではないほど多いのだ。

空野はすぐさま直美にこれを報告し、援護を要請するよつて言つた。
すぐさま小惑星基地から宇宙用戦闘機が集結した。

直美の指示の下、空野達は相手が攻撃してくるのを待つた。

しばらくするとEAVNの艦からビーム砲がはなたれ、それが鏑矢となり戦闘が始まった。

アマテラスは逃げるかのよひ不定とスピードを上げていぐ。

空野たちは艦から離れないよつて遠距離から射撃を行なつていたが、しだいに敵が接近してくるので、ヘリオスを飛行変形をせて接近した。

接近したら翼の実体剣で斬るつもりでいたが、それをつまく交わされてしまったので、すぐさまMS変形になり、袖からビームサーベルを抜刀した。

そのまま敵MSにしみ、クピットに向かつて突き刺した。

そして他の敵とも戦っているうちにアマテラスが遠くへ行ってしまつたため、

空野は
空野は急いで飛行変形したが、マリーもとり残されている様子で、

「ドッキングしろ。ヘリオスが飛行変形で行けばすぐに追いつく！」
と言つたが、マリーは

「——の敵を高出力ビーム砲一気に排除するからだッキンクして、その時の反動をうまく使えば作用反作用の法則で艦に追いつくわ」と言った。

「…」

「失敗したら承知しねえぞ」と言いつつ、ドッキング用コードをだしへビウスに接続した。

空野は、マリーは絶対にこれをやる気でこれ以上言ったところでもやるつもりだらうと観念し、

マリー「その時はヘリオスの飛行変形とドッキングするわ」

マリーの「行くわよーーー」の声でビーム砲を発射した。

空野もLS-Dの出力を調整しながら向きをアマテラスに向ける。

マークと空野は一齊に叫んだ。

敵は次々に撃破され、空野とマリーは無事にアマテラスに近づくことができ、ドッキングを解除する。

マリーが通信で空野に

「おつかれさま」

と言つた。

空野はそれに対し
「お前を信じてやつただけだ」
と言つた。

そして、アマテラスに着艦した。

。

第八話～鏑矢～（後書き）

さてと、初めてあとがきをかく気がするけどまあ多分気の所為だ
(笑)

次回にはきっと円基地に行く予定です（あくまでも予定です）。

本家本元のサンライズの新ガンダムはガンダムAGEかあ・・・
なんでもターゲットは小学生か（・・・・・）

と言いつつ観る予定ですけど（ ）

まあ、オリジナルの ガンダムのほうもよろしくお願いしまーす
つと。
でわでわ

第九話 一月

空野 すげ

マリー これが・・・地球・・・

空野とマリーは生まれて初めて宇宙から地球を見ていた。

今更かと思うかもしれないが、今までには宇宙戦で、地球を見ているところかじやなかつたのだ。

自分たちが月基地へ行く理由は、燃料や物資の調達と、新しい機体を作ること。それから新しいパイロットの迎えに行くことだ。

元々は、月基地へ行く前に、小惑星基地で燃料を調達する予定だったのだが、

ブリッジ

ソフィー・入港シーケンス確認

シヨアーマテス、入港也。

アマテラスは月基地へ入港した。

月光の夜の夢

い
る。

また、ほとんどの軍が月基地を作つたため、
と嫌味を込めて言われていることがある。

艦のほとんどが、飯島直美大佐に許可を貰い、遊びに出かけた。
空野とマリーも許可をもらい、月夜見も誘つたが
MSの製造があるのでこのことで月夜見にお土産を買つことを約束し、
遊びに出かけた。

第十話～桐生ルーク～

飯島大佐「今日からお前達も学生だ」

空野&・マリー「…………はい？」

月の繁華街から艦に戻るとそう飯島大佐に言われた。

飯島大佐「聞こえなかつたか？お前達は今日から学生なのだ。学生らしく勉学に励めよ」

空野「…………大佐、学生ってどういうことでしようか…………？」

飯島大佐「うむ、ここにいる間は敵も襲撃してこないだろうし、月面基地には世にも珍しいPL軍教育機関高等部。略して軍高がある。私もかつて在籍していた。」

空野&・マリー「は…………はあ…………」
飯島大佐「そこにいるお前達より1個上のやつが新しいガンダムのパイロットだ。」

空野&・マリー「新しいガンダムのパイロット…………」
飯島大佐「そうだ。明日の7：00に艦の前で待ち合わせている。名前は桐生ルークだ。」

空野「桐生ルーク…………わかりましたその人と艦の前で会えばいいんですね」

飯島大佐「そうだ。」

空野&・マリー「了解」

翌日

「やあ、君達がガンダムのパイロットだね？」
と背の高い高校生あたりの人気が聞いてくる。

空野&・マリー（背高！）

と思いつつ

空野「はい。空野しょ・・・」

桐生「空野翔太とマリー・スペクトルだね？空野がヘリオスガンダムのパイロットでマリーがメビウスガンダムだね？」

空野「はっ、はい・・・」

桐生「そんなにかしこまりなさんなって。俺の名前は桐生ルーク、新しいガンダム・・・P-L-L-S003MS、ガンダムアマシラの時期正式パイロットだ。よろしく！」

と手を差し伸べてきた。

そして空野マリーの順で手を差し出す。

そして、学校に向かう。

桐生「へっ、それじゃあ、基地の隣にあつた学校つてお前らの学校だつたのか？」

空野「ええ。そして色々あつてガンダムに乗つてるわけですよ」

桐生「人生の修羅場を潜り抜けてんだねえ」

マリー「それほどでもないですよ」

学校に着いたらいつもの癖で寝てしまう

「ゴチン！」

空野「つて！！」

教官「授業中に寝るとは随分とお偉い身分だな、少尉」

空野「申し訳ありません」

と殴られた所を抑えながらあやまる。

そこに

ウーウー

とサイレンが鳴る

シグナルレッド、シグナルレッド

総員避難せよ総員非難せよ

但しガンダムのパイロットはアマテラスへ行け

繰り返す総員非難せよ但し、ガンダムのパイロットはアマテラスへ

行け

空野「行くぞマリー！！」

マリー「ええ」

廊下を走っていると、桐生先輩と会流した

空野「桐生先輩！！」

桐生「先輩はいらん」

マリー「桐生さん」

桐生「それでいい」

と走りながらアマテラスについた

第十一話 テロリスト

空野一元、元口リストオオオオオオ！？」「ブリッジに空野の叫ぶ声が響き渡る

飯島大佐「そうだ」

といつも通り冷たく言う

桐生：そんで、元リストさんの居場所はどうですか？」

「食島力佐、全ての墓地のなかと真上だ
はまともに動けん。しかし、ここは違つ

卷之三

「恐らく、目視できるものと、やつらが知っているところにしか群がつていかないんだろう」

空野村が引退した。その出口から方々が見

飯島大佐「物分りが早いな。なあに心配する事は無い向こうにはM

Sに無しからな

桐生一 ひで もビルアーマー 僕への出撃許可は? 「

餉島大佐「宇宙作業用MAは武装を積んだせいか生身で戦うか?」
洞主「やめさせていたい者ます!!!」

飯島大佐「ということだ一人でやれ」

空野&l.;マリー・トーナーは、

と、二人で格納庫に向かう

空野・月夜見 ガンダムの修復状態は? [

月夜見 万全た

空野「そうか。桐生さんのガンダムさつさと作つてやれ、相当落ち

込んでるぞ」

月夜見「了解」

とガンダムのコックピットに座る。

空野「こちらへリオスガンダムの空野翔太、発進許可をください」
マリー「こちらメビウスガンダムのマリー・スペクトル、同じく発進許可をください」

ソフィ「ヘリオスガンダム、メビウスガンダム発進を許可します。
ハッチ開放します」

と言つと、艦のハッチが開き、たちに、地下の出口のハッチが開いた。

空野「空野翔太、ヘリオスガンダム、行きます!!」
マリー「マリー・スペクトル、メビウスガンダム、発進します!」

と、宇宙空間へ飛び立つた

第十一話～命の重ね～

テロリスト達は基地と二つ基地を制圧していた
空野はマリーに通信する

空野「こちり空野。牽制目的での攻撃をするけど、マリーはやるな
マリー「了解」

と空野のガンダムはマシンガンをテロリストに向けて撃つ
テロリストは空野に注意を向けたとたん、
P-L軍がMAを射出し、テロリストを一網打尽にする
しかし余りもノも居るわけで・・・

空野「今だ、マリー！」
マリー「了解！」

と極太ビームを発射する

これで終わりだと思つたら他の基地に居た
テロリスト達が一斉に向かつてきた

空野はMS変形し、マシンガンで牽制する。

そして、制圧されていた軍が動き出した
空野は、テロリストを拘束するために
カーボンネットを発射し、絡ませるが、
その機体は自爆した

空野は、特攻していくるテロリストにも同様にしたが、やはり自爆した。

残るテロリストも特攻するか自爆するかで、この戦いは終わった。

暫く無言が続き、マリーと空野は着艦した。

空野たちは、嫌でも命の重さというものを感じた

第十三話～PL-LS003MS、ガンダムアマツラ～

月夜見から、新しいガンダムが完成したとの連絡を受け、桐生と空野とマリーは格納庫に来ていた。

月夜見「これが新しいガンダム……PL-LS003MS、ガンダムアマツラです」

そこには、赤と白を基調とし、額には金色のV字があるガンダムがあった。

桐生「おお、これが俺のガンダムねえ」

月夜見「ヘリオスガンダムに新武装を取り付けたので試験もかねて模擬でもしてみたらいかがでしょうか?」

桐生「いいのかい? よし! 空野、頼んだ」

空野「了解。ところで新武装って?」

桐生「新武装を知らないのか? 新武装とは新しい武器のことだ!」

空野「誰もアンタに聞いてません」

桐生「(・・・)」

空野「これ(桐生)は置いといて、何を用意してくれたの?」

月夜見「連結銃だ」

空野「連結銃?」

月夜見「腰に拳銃が見えるだろ? あれはあれで単体で一丁拳銃として使ってさらに合体すると」

空野「スナイパー・ライフル」

月夜見「その通りだ」

そして、空野たちはパイロットスーツに着替え、それぞれのガンダムに乗り模擬戦を行うためのポイントへ行く。

空野「いいんですか? いきなり俺なんかと」

桐生「問題ないさ、今のは挑発と受け取つておこう」

空野「なら、空野翔太、ヘリオスガンダム、行きます！！！」

桐生「桐生ルーク、ガンダムアマツラ、出るーー！」

第十三話～PL-L5003MS、ガンダムアマシラ～（後書き）

ガンダムアマシラ

型式番号・PL-L5003MS

特徴・赤と白を基調にした額に金色のV字アンテナがある。

武装・両腕にビームトンファー（拳銃にもなる）

パイロット・桐生ルーク

桐生「武装少なくないかい？」

作者「気に入ら負けだ」

ちなみに、空野の連結銃はガンダムSEEDのストライクフリーダムから貰いましたww

空野と桐生は模擬戦をしている。
ルールはなど

- ・一発でも攻撃を食らつたら負け
 - ・どちらかが指定された場所を一部分でも出ると失格
 - ・と言う簡単なものがこれでは桐生がつまらないと言いつつ負けたらジユースを奢る

ちなみに、二人して浪費癖があり
そのため・・・・・・・・・・・・・・

ピューン

空野&桐生「シニス奢りやかれええええええええ」
空野がビームライフルを撃つ

トンファーの先つちょからビームを出す

空野は飛行変形し、それをかわしながら桐生に突っ込む
そしてビームマシンガンを撃ちながら桐生の背後に回る

右にビームサーべル、左にビームハンドガンの構えになる

ガンダムアマツラの頭に振り落とす

それを相生が右のピースにて臺に上めた
ピッシ――――――ン

桐生は左のトンボリからビームを撃つとするが
ピコーン

空野があらかじめ握っていたビームハンドガンからビームを撃つ
それがアマツラの左手にあたる

つまり、

空野の勝ちだ

そして艦に戻り、空野はしつかりジュースを奢つてもらつたとさ

第十四話 模擬戦（後書き）

空野「更新遅いぞ」

作者 ナモキユウナイネ

空野 そこがなまく
三者「ジマ」

作者二

第十五話／低軌道接戦

現在、アマテラスの戦闘員とブリッジクルーは艦のブリッジに集まつていた。

飯島大佐「軍本部から事例が下りた。今から、地球にある軍の伊豆防衛基地へ一時帰島する」

これが、そのルートだ。

と、正面モニターにルートが映し出される。

飯島大佐「現在は敵も無く無事に地球にいけるはずだ。ただ、気がかりなのが一つ・・・・・・」

「というと、正面モニターが切り替わり、黒い影が一つと、白い影が一つ横切っている映像があつた

空野「これは・・・・・？」

飯島大佐「先ほどカメラで探知した。所属不明のMSだ」
マリー「でも、所属不明機とはいえ・・・・・この機動性、ガンダム並ですよ？私たちで勝てるかどうか・・・・・・」

飯島大佐「心配するな、とは言えないが、一応要注意のレベルでいいだろう。わざわざMSで大気圏突入なんてバカな真似はしますまい」

空野「でも、ガンダムも大気圏突入はスペック上可能ですよ？相手がガンダム以上の性能ならば・・・・・・」

飯島大佐「スペック上は大丈夫だとしてもそんな危険なまねはしますまい。問題ないとは言い切れんがな。」

%

かくして、アマテラスは地球の基地へ向かうために月から出港したのであった。

白いMSのパイロット side

白いMSのパイロット「目標艦、月基地の出港を確認。エネルギー充填率97%、砲撃まで後10second」と、私は黒いMSのパイロットに通信を繋げる。

黒いMSのパイロット「了解。しくじるなよ」白いMSのパイロット「わかつております、マスター。遠藤サヤ、レディアントガンダム。砲撃します！」と、山吹色のビームが発射される

空野 side

すごい衝撃といえばいいのかわからないが、とにかく砲撃を喰らつたみたいだ。

そして、桐生ルーク、マリー・スペクトルと共に、出撃待機命令が出された。

そして、ソフィーから出撃許可がありました

ソフィー「前門1番2番ハッチ空けます。空野少尉が1番、スペクトル少尉が2番を桐生少尉は空野少尉に続いて1番ハッチから出撃してください」

桐生、空野、マリー「了解」

ソフィー「ハッチ開放1番2番出撃どうぞ」

「空野翔太、ヘリオスガンダム、行きます！！」

「マリー・スペクトル、メビウスガンダム、発進します！」

ソフィー「続いて1番ハッチ出撃どうぞ」

「了解！桐生ルーク、ガンダムアマツラ、出るーー！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1398s/>

機動戦士 ガンダム

2011年11月20日04時01分発行